

(第3種郵便物認可)

サイ・テク こらも 知と技の発信

【385】

埼玉大学・理工学研究の現場

埼玉大学の教員として、数学の科目の講義を担当できることは、最近2年間自分にとって新規でもうれしいことである。基本的な。他大学での非常勤講師のものに毎週1回90分間、15週に渡り講も合わせて記すが、集合論(1年義は行われ、学生たちは最後に期生)、位相論(1年生)、常微分末テストを受けて単位を取得して 方程式論(2年生)、フーリエ解析(2年生)、複素関数論(2年



まちはらう・しゅじ 1973年生まれ。2002年3月、北海道大学大学院理学研究科博士後期課程修了。学位(理学)取得。島根大学総合理工学部助手、助教、埼玉大学教育学部准教授、埼玉大学大学院理工学研究科准教授を経て、18年より現職。専門は双曲型、分散型の非線形偏微分方程式

電子的ノートの長所

町原 秀二 教授

生)、ルベーク積分論(3年生)、測度論(3年生)、偏微分方程式論(4年生と大学院生)となる。

■数式専門ソフト

新規の講義と書いたが、それは新しく講義ノートを作成するといふ意味である。私の講義ノートは、ほぼそのまま黒板に板書する内容を記したものである。板書ノートと呼んでもいいかもしれない。私の場合、その講義ノートは必ずパソコンで電子的に作成して、それを講義当日に印刷したものを片手に持ちながら板書を行っている。

パソコンで作成するノートは、もう少し細かい話をするとなつと呼ばれる数式専門の組版ソフトを用いて作成している。この組版ソフトは非常に使い勝手の良いもので、定理の番号を付けたり、式番号を後に引用出来たりと数学の文章を作成するのに非常に助けになる。もちろんそこが有効な箇所であればコピー&ペーストも編集作業の強力な武器である。

■論理の「編み物」

理想的には15週間の講義の第一週目を迎える前に講義ノートが完成しているといふ。それはやはり論理を組み立てていく過程での説明する順番といふものがあるからである。しかし、どうしても間に合わなく講義当日の朝に完成するという自転車操業になってしまう。た科目もあり、受講生には迷惑を掛けた。

この論理の組み立ての作業が非常に楽しい時間となる。とても心が安らぐ時間である。例えるならば編み物をしている感じか。上記の通り学部生の初歩的な数学であるが、その中にはキラキラと眩しい論理的構造が幾つもちりほめられていた。

またノート作成するまでは深く考え、苦しみ悩んでいた問題も、解決後ノートに記した瞬間に手元を離れ、忘れることができるという達成感もつれしかった。

最後に、この電子的ノートの職業的長所を述べよう。それは数年間再利用できることである。なんとも夢の無い話だが、私は次は埼玉大学の研究者としての仕事がある。